

## スウェーデンの国土地理院



スウェーデン・ティンメナッペン在住

藤倉・カールソン・篤子

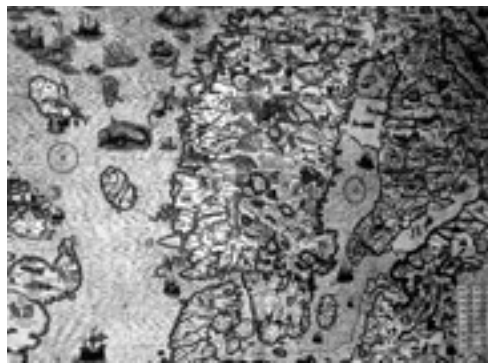
今の職場（地理院）に勤務し始めてからこの春で20年が経ちました。スウェーデン語も危うかった外国人にチャンスを与えてくれたこの国の人々と法律の寛容さに今になって感謝の念が湧いてきます。ペンと定規で地図を手作りしていた時代からコンピューターが導入された1991年には電子地図を作り始め、今は基盤電子地図の情報整備に主にかかわっています。スウェーデンの国土地理院は環境庁の支配下で地理情報、不動産の合筆や分筆と登記、都市計画や環境保全情報などの登録、地図照会システム、地域名の認定などの業務を行っています。日本から研究者が見学に来られたとき、日本で言えば国土地理院、法務局、市町村の区画整理と民間の測量事務所を全部合わせたような機能を持っているとおっしゃっていました。

同僚たちに普通によく訊かれるのは「日本ではすべての道路に名前が付いてない…って本当？」という質問です。西欧では「××番、△△通り、〇〇市」というように自分の住所を道路名を使って案内する考え方で成り立っているので名前が無い道があるのは大変困るわけです。それに比べて日本では「〇〇市、△△区、□□三丁目…」というように街区で切り取って自分の住所に辿り着く方法です。これは日本というよりも東洋的な発想なのかもしれません。ス

ウェーデンでは行政区画や不動産の分割に際する基盤地図情報の元となる測量から登記までの業務を国（または市）の地理院が独占しているのが特徴で、この分野が地理院の大きな収入源にもなっています。この類の地図には道路や鉄道、建築物など目に見えるものだけでなく、行政区画や各地番同士の境界線など目に見えない約束事が描かれてあります。スウェーデンの基盤地図においては日本の基盤地図にはない地番が表記されているのが大きな違いです。スウェーデンでは地番の情報を公開して、権利や義務を確認するためにこの地図が利用されるので地番表記は最も重要な約束事の表記ですが、日本では個人情報を守る立場が最優先されているようです。大きな地震のニュースがあると「動いた地番間の境界線なんかは日本ではどうするわけ？」とコーヒープレイクの話題に上ったりします。

## 古地図

1500年代のころのスウェーデンの地図を見ると陸を囲む海上には怪しい想像上の動物がウヨウヨと描かれています。海は船を呑みこむ嵐や外敵が沢山いる危険な場所だったことがよく表れています。当時の地図には目に見える森や川の他に、バイキングの時代から繰り返し味わってきた海への畏れが



1539年、Olaus Magnusiによるスカンジナビア地図



1660年頃、Joan Biaeauによる日本地図

読み取れます。数年前にストックホルムの旧市街の古地図屋で見つけた日本地図を思い切って購入したことがあります。江戸時代初期、鎖国令がしかれてオランダ人たちが出島に移されたころ、オランダ人によって1660年代ころに描かれたものです。測量家伊能忠敬が活躍する100年も前の地図は山と川と城が地名とともに表されているけれど、形は現在の日本地図からみるとあちこちゆがんで主観的です。北海道は本州から実際よりもずっと離れていて道南がチョロっと「エソ」とだけ描かれています。人々が蝦夷の存在を「遠く未知の地」として捉えていた感情が地図の上から読み取れるのが面白いと思います。そして富士山は当時も最も高く美しく「フジノヤマ」と呼ばれ、日本人の誇りだったと思われま